



野村水銀鉱山

最盛期、2,000人を超す労働者



置戸鉱山事務所前で

昭和14年、北光の佐藤幸三郎さんが自家用飲料水のための井戸掘り中、深紅色の鉱石を発見しました。相談を受けた置戸在住の鉱山師（やまし）鈴木勢治さんがこの鉱石を持って薬局で分析してもらったところ辰砂であることが判明。水銀鉱探掘申請を提出し、間もなく許可が下りました。

一方この頃、留辺蘂では野村鉱業株式会社がイトム力において水銀生産に拍車をかけていました。当時水銀は、艦船の塗装や魚雷の起爆剤として不可欠なものであり、そのほとんどを南洋諸島から仕入れていましたが、大東亜戦争を前にして国交が途絶したため、国は軍需補償金を出して国内生産を奨励していました。置戸で水銀発掘の報を得た野村鉱業では、さっそく調査・買収に取りかかり、昭和16年、北光から採掘された水銀鉱は野村鉱業置戸水銀鉱山となりました。国は国策として「重要鉱山」に指定し、不足する労働力を補充するため中国人俘虜も導入するなど、一時は2,000人余りが働く職場となりました。

しかし、敗戦による軍需補償金の打ち切りなどにより生産がストップすると、鉱山機材を売って暮らすタケノコ生活が始まり、しだいに新しい職場を求めて去って行く人が多くなりました。完全閉山となったのは昭和25年で、野村鉱業置戸鉱山での水銀発掘は9年目にして幕を閉じました。

その後、戦後復興期には、水銀が農薬等への需要増で高騰したため、野村鉱業では閉鎖した置戸鉱山にも食指を動かし始めましたが、昭和40年代半ばから水銀の公害問題がクローズアップされ、同48年にはイトム力鉱業所も自山の採鉱や精錬部門を閉鎖しました。

現在、隆盛を極めた鉱山の名残をとどめるのは、鉱山事務所跡に建つ「野村鉱業置戸鉱山跡」の石碑と、バス停の「上鉱山」「下鉱山」の標識くらいとなり、鉱山職員として羽振りを利かせていた人や、旧制中学生時代にこの水銀鉱で勤労奉仕をさせられた思い出を持つ人もほとんどいない今となりました。（参照：置戸町史下巻、続置戸町史）



せきぐち
関口
みか
美香さん (勝山)

平成25年度農村生活体験生「地遊人(じゆうじん)」のお二人を紹介します。

①出身地②略歴③応募のきっかけ④趣味⑤ひとこと

①大阪府枚方市②網走の東京農業大学を卒業後、大阪で営業の仕事をしていました③旅行中の宿泊先で地遊人の募集パンフレットを見て応募しました④旅行、スキュー・バധイビング⑤地域の皆さんとのコミュニケーションを大切にしながら、田舎暮らしを楽しみたいです。あと、ナキウサギを見られたら最高ですね。

①青森県青森市②東京でガラス工芸の仕事をしていました③東京目黒で開催されたDOMA秋岡芳夫展の会場内で配布されていました地遊人の募集パンフレットなどを見て興味を持ちました④ガラス工芸⑤中標津に住んでいたことがある両親から道東の話を色々と聞いて育ったので、ずっと憧れています。農作業がとても楽しみです。



なか や
あきこ
中谷 聰子さん (豊住)